

# 高齢者の仕事経験が世代性に及ぼす影響に関する研究

桐葉 千花

高齢化の進行に伴い、社会活動は高齢者自身の生き方と社会の維持発展の双方の側面から求められている。社会活動を行う高齢者は社会や次世代への貢献度が高い活動に参加しており、また、6割近くの高齢者が若い世代との交流を希望している。そこで、「次世代を確立させて導くことへの関心」と定義される「世代性(Erikson,1950)」という概念に着目する。世代性は出生以後、教育の過程や結婚、子育てや職業経験等の社会との相互作用を通し、長い年月をかけて発達していく(丸島, 2000)。世代性の概念を構成する心理社会的要素の1つとして文化的要請(McAdams et al., 1998)があり、これは成人に対して年齢相応の人格的発達や社会への貢献や責任が期待され、成人はそれらを担う役割に傾倒しようとする動機を表す。日本の企業ではコミュニティにおける仲間意識が強く、考課要素の一つに部下の育成がある。そのため、仕事経験における部下との関与は文化的要請が存在する機会であると考えられる。また、仕事の性質や役割によって世代性の発達に個人差が見られる可能性がある。

よって本研究では職場で部下を指導した経験が、高齢者の世代性の個人差に与える影響を明らかにすることを目的とする。仮説では、職場で部下を指導した経験が世代性に影響し、部下との関与の程度が大きくなるほど、世代性が高くなるとした。部下関与、職種、居住地域を独立変数とし、世代性得点を従属変数として3要因分散分析を行った。部下関与の変数は、雇用形態と役職及び管理的な業務の割合をもとに作成した。なお、世代性に性差が表れる傾向があることや、本研究の対象者である70歳代の高齢者が働いていた当時の社会的背景のもとでは仕事経験における性差が大きいと考えられることから、男女別に分析を行った。

部下関与が世代性得点に与える影響を検討したところ、男性では部下関与の主効果が有意傾向であった。女性では部下関与と職種と居住地域の2次の交互作用が有意であり、田舎かつブルーカラー群において部下関与の単純・単純主効果が有意傾向であった。したがって、仕事経験における部下との関与の程度が高齢者の世代性に何らかの影響を与えている可能性が示され、仮説は一部支持された。

職種が世代性得点に与える影響を検討したところ、男性では職種の主効果が有意であり、女性では田舎かつ部下あり高管理群において職種の単純・単純主効果が有意であった。また、居住地域が世代性得点に与える影響を検討したところ、女性ではホワイトカラーかつ部下あり低管理群、ブルーカラーかつ部下なし高管理群において居住地域の単純・単純主効果が有意であった。したがって、高齢者の世代性は単純に部下との関与のみが影響するのではなく、どのような状況で働いているかという複合的な仕事の条件によって左右されると考えられる。

本研究の問題点として、今回用いた部下関与変数が実際の部下関与の程度を正確に示すことができていない可能性がある。管理の機能は果たさないが、社内身分としては管理職として扱う役職の存在や、雇用形態による状況の違いなどが考えられるため、今後は仕事経験における部下関与の指標を再検討する必要がある。また、本研究では戦前生まれで主に高度経済成長期に入職したコホートを分析の対象とした。しかし、雇用慣行や働き方などの仕事に関わる社会状況は時代とともに移り変わっている。そのため、別のコホートでも調査を行うことで、高齢者の仕事経験が世代性に与える影響についての研究を発展させることができると考えられる。今後は部下との関与についてさらに情報を収集するとともに、仕事状況に関する様々な条件を考慮に入れた上で、本論文で言及した課題点を踏まえ、高齢者の仕事経験が世代性に与える影響について検討していくことが望まれる。(臨床死生学・老年行動学)